

「青山学院における女子教育の歴史を振り返る」

vol.2 「青短の誕生と発展」



旧本館正面 (1949年建築)

会期：2019年 **10月28日(月)～11月22日(金)**

会場：短大北校舎2階廊下 ※休館日 11月10日(日)・16日(土)・17日(日)

時間：9:00～17:00 ※11月2・3日(土・日) 青山祭期間のため 10:00～16:00

ギャラリートーク：**10月29日(火) 久保 制一先生** (子ども学科特任教授)

12:50～13:10 11月13日(水) 小林 瑞乃先生 (現代教養学科日本専攻准教授)

青山学院女子短期大学では、70周年記念ギャラリー展「青山学院における女子教育の歴史を振り返る」を2019年度から2020年度にかけて、4回にわたって開催いたします。第2回は「青短の誕生と発展」と題して、1946年に誕生した女子専門学校から、1950年の短大開学、そして現在に至る大学の歴史を展示で振り返ります。

- 女子専門学校の誕生、そして青短へ
- 青短の誕生－文科(国文専攻・英文専攻)・家政科－
- 児童教育学科・教養学科・芸術学科の誕生
- 3年制子ども学科への発展
- 現代教養学科への再編 他

タイアップ講演(青山学院女子短期大学公開教養講座) **11月9日(土) 11:00～12:30**

「リベラルアーツを支える図書館」堀川 照代 先生(現代教養人間社会専攻教授)

主催：青山学院女子短期大学

企画主体：総合文化研究所研究プロジェクト「大学におけるジェンダー教育と男女共生社会」

運営主体：新研究所準備委員会(総合文化研究所)

協力：青山学院資料センター・短大同窓会・広報企画委員会



vol.2 「青短の誕生と発展」

会期：2019.10.28-11.22

会場：北校舎 2階廊下

青山学院女子短期大学 70 周年記念ギャラリー展
「青山学院における女子教育の歴史を振り返る」
vol.2 「青短の誕生と発展」

ごあいさつ

青山学院女子短期大学学長 八耳俊文

青山学院女子短期大学 70 周年記念ギャラリー展「青山学院における女子教育の歴史を振り返る」第2回「青短の誕生と発展」によろこおいで下さいました。前回は本学の源流である 1874 年にスクーンメーカーにより開始された女子小学校から、1945 年の終戦までを扱いました。今回は戦後の青山学院の女子教育です。

1946 年 4 月、戦前・戦時中の女子専門部は女子専門学校と校名を改め、英文科、国文科、家政科、家事専修科をもって戦後の教育がはじまりました。実際、最大の課題は戦災で失われた校舎の再建であり教室や備品の確保でした。教育を受けたい、教育機関としての使命を果たしたい、との思いが結びつき、一つひとつ実現されていったのです。これにあたって米国のメソジスト監督派教会女性海外伝道協会からの寄贈金があったことも忘れることはできません。

1950 年 4 月、女子専門学校を引き継ぎ、青山学院女子短期大学が発足しました。私たちの青短がここに誕生したのです。青山女学院以来の女子の高等教育機関として存続する役目を担うとの誇りをもって学校が運営され、現在に至っています。今回の展示では「振り返る」をテーマとしていますが、過ぎし歴史の見直しだけでなく、2006 年にはじまった子ども学科、2012 年にはじまった現代教養学科も取り上げ、青山学院女子短期大学全体を戦後の日本の教育の中に問うとのねらいを持っています。ご覧になられた方それぞれが受け止めてくだされば幸いに思います。

ギャラリー展は全 4 回から成り、次回は「ミッション×女子教育×ジェンダー」をテーマに 2020 年 3 月 23 日(月)～5 月 9 日(土)に開催する予定です。次回もみなさまがたのご来場をお待ちしております。最後となりましたが、開催にあたりご協力をいただきました青山学院資料センター、短大同窓会、本学広報企画委員会をはじめとする各位に、心より感謝申し上げます。企画は、本学総合文化研究所プロジェクト「大学におけるジェンダー教育と男女共生社会」が主体となって進めました。

I 青山学院の女子教育の戦後 女専から青短へ

新生日本と女子高等教育 —「青山学院女子専門学校」の出発—

小林 瑞乃（現代教養学科日本専攻 准教授）

1945年8月15日敗戦を迎えた日本では、新たな社会の構築とともに戦後教育改革が始動した。教育の民主化により10月に宗教教育が認められ、12月には女性への高等教育開放の方針が示され（閣議決定「女子教育刷新要綱」）、原則として男性に限られていた大学進学の手ががようやく女性にも開かれ、女子専門学校の新設が相次いだ（1947年4月までに全国で47校）。1947年には日本国憲法の精神に基づく「教育基本法」が制定された。

戦災で校舎の大半を失い焼け野原となった青山学院も、新たな歩みを開始した。1946年4月、青山学院女子専門部は「本来ノ面目個性ヲ發揮」するべく「青山学院女子専門学校」と改称した（初代校長古坂崑城）。学則には「教育勅語ノ御趣旨ヲ体し」と戦時中の文言が残ったが、1948年度には「女子に高等の教育を施し基督教精神による人格陶冶を行うこと」が目的と改められた。学科編成は「文科（国語科）」「外国語科（英語科）」「家政科（保健科）」（以下学内の呼称「国語科」「英語科」「家政科」とする）と家事専修科で、入学定員は国語科40名、英語科50名、家政科70名、家事専修科50名であった。英語教育は本学の伝統的な特色であり、戦時の時局ゆえに廃止にいたった英語科がここに復活したのである。

入学志願者は非常に多く、合格倍率も高かった。英語科319名（合格者22名、14.5倍）、国語科96名（同38名、2.5倍）、家政科411名（同52名、7.9倍）、家事専修科197名（同39名、5.1倍）で、1946年度の在籍生徒数は431名、専任教員15名、非常勤39名であった。

受験を勝ち抜いた生徒たちの成績は非常に優秀であり、1946年度第1学期の1年生の個人別全科目の平均点は最高と最低の開きが少なく、国語科85.8-74.5、英語科89.6-71.6、家政科91.9-79.3、家事専修科93.0-78.1と、皆極めて高い水準にあった（『青山学院女子短期大学の歩み』24～26頁、以下『歩み』とする）。

敗戦の混乱と窮乏のなか衣食住に事欠き、極度のインフレーションで授業料は高騰し、生活物資は欠乏して、焼け跡の校内を生徒と教員がサツマイモを栽培するほど食糧不足は深刻であった。この苛酷な状況にあっても学ぶ意欲は旺盛で、どんなに押さえつけられても消えることのなかった向学心の強さを物語っているともいえるのだろう。



青空礼拝（『青山女学院史』より）1946年



女子専門学校 バレーボール部
（青山さゆり会会報『さゆり』より）1947年以後



女子専門学校家政科の聖劇
（青山さゆり会会報『さゆり』より）1948年



女子専門学校別館 普通教室 1948年

戦災で全焼したため教室や設備、図書等を学院本部や高等女学部から借りざるをえず校舎再建は大きな課題であった。米国のメソジスト監督派教会女性海外伝道協会の寄付金を基金に「新館」（「本館」完成後は「別館」と呼ばれた）が完成したのは1948年10月、翌1949年11月には「本館」が建設された。

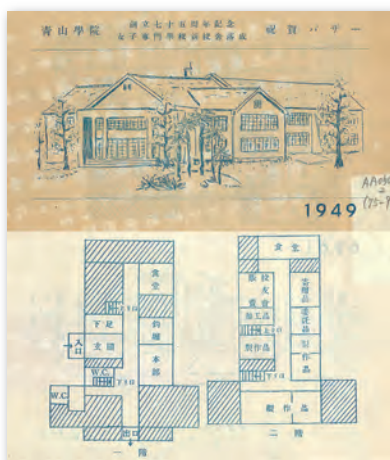
1947年3月「学校教育法」が公布され、「六・三・三・四制」を基本とする学校体系に改められた。既に2月の教職員会で、新学制移行に際し四年制女子大学への転換が考えられていた。青山学院でも議論が本格化し、8月9日の復興協議会（院長・各校長・各部長・関係理事で構成）では、1949年度から女子専門学校を女子大学とする、もしくは男子の専門学校と合併して大学を開設し女子のみの学級を編成することが決定された。女子大学の構想では家政学部（生活科学科・生活芸術家・栄養学科・社会学科・児童学科）と文学部（国文学科・英文学科）の2学部と二年制ジュニア・カレッジ併設が記されていた。

翌1948年7月には、男子と女子の両専門学校統合を前提とした「青山学院大学設置認可申請書」が文部省に提出された（『青山学院大学五十年史』46～47頁）。しかしその後、大学昇格構想から女子専門学校は取り残されることとなった。青山学院全体の財政的理由から二つの大学設置は難しく男子の専門学校を単独で大学に昇格することとなり、準備を進めてきた女子専門学校の当事者には大きな衝撃であったと伝わっている（『歩み』39～40頁）。

こうした方針転換によって、二年制女子短期大学開設が準備されていく。1949年10月に提出された「青山学院女子短期大学設置認可申請書」の「将来の計画」には四年制大学への移行も記載されていた。こうして四年制大学への未来を見据えつつ、キリスト教信仰に基づき日本の女子教育を牽引してきた歴史と伝統を基盤として、更なる飛躍への挑戦が始まるのであった。



女子専門学校校舎（別館）落成記念 1948年



女子専門学校校舎（本館）落成祝賀パナーチ招待状（上） 会場案内図（下） 1949年



大講堂手前の空き地（女専校舎前）は、野菜畑 1949年



女子専門学校礼拝（大講堂）1949年

I 青山学院の女子教育の戦後 女専から青短へ

青山学院女子短期大学の創設

小林 瑞乃（現代教養学科日本専攻 准教授）

学校制度改革を推進していた連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の民間情報教育局（CIE）の顧問にイールズ（Walter Crosby Eells）博士が就任すると、ジュニア・カレッジ制度は急速に実現化していった。女子専門学校長古坂嘉城もこの制度に前向きで、ジュニア・カレッジ設立準備委員の一人となり制度の可否に関する研究に携わった。大学設置に関する建議や審議を経て、1949年5月学校教育法の一部が改正され、翌1950年4月短期大学が開設されるに至った。

この制度を推進した関係者の熱意と理想は高く、従来の専門学校とは質を異にし、専門職業的教育と一般的教養教育の均衡のとれた大学として、また四年制大学の前期課程ではなく、四年制大学と同様に完成教育を施行する別個の新しい大学として構想され、この理念は有識者の共感を得て広がっていく。1964年度に恒久化されるまで制度的には不安定な暫定措置とされながら、日本の女子高等教育の民主化に重要な役割を果たしつつ大きく発展していくことになる。

青山学院女子短期大学は、1950年4月文科（国文専攻・英文専攻）と家政科の編成で発足した（学長向坊長英）。開学直後から十数校の短大関係者が「文部省の方からの勧めと紹介」で視察に訪れて「モデルスクールの観」があったという（1950年9月15日『青山学院新聞』37号）。

一般教育（当初は一般教養）の導入は新制大学の特色の一つであったが、戦前から教養教育を重視してきた本学では、狭い職業教育にとどまることなく「図書館学」「タイプライター」「速記」等とともに短期大学基準をはるかに超える科目数を用意し、一般教養科目や専門分野の研究深化のために各専攻で特色ある科目を新設した。例えば、文科国文専攻では開学より「研究旅行」が実施され、1955年度には卒業論文を目指して特定のテーマ研究を深める「国文特別演習



一般教育・化学 1951年頃



家政科授業風景・栄養学 1952年頃



家政科授業風景・調理 1955年頃



国文専攻研究旅行



家政科授業風景・和裁 1955年頃

並論文」を新設し、1956年度には「短歌創作」「俳句創作」「童話創作」などを開設した。家政科では主体的な学問研究を推進するため「家政特別研究」を新設し、各自の興味や関心に応じた分野について文献調査や実験・実習、研究成果の発表などを行った。

入学志願者は年々増加し、文科国文専攻50名、英文専攻100名、家政科100名、合計250名であった当初の定員を増やしたが、1951年は志願者1150名中合格者363名(定員300名の3.8倍)、1952年は1807名の中合格者341名(定員330名の5.3倍)で、まもなく7~8倍となりその後は10倍近い倍率が継続したという(『歩み』52頁)。

このように社会的評価は高く、競って入学した学生は意欲に溢れ学力水準は他の四年制大学に伍して遜色なく、だれの目にも更なる飛躍が期待されていた。

全国の短期大学を牽引し、最初的女子高等教育機関の一つである青山女学院専門科の志を継いで日本の女子教育の進展に少なからぬ貢献を果たしつつ、社会情勢や女性のライフスタイルの変化を踏まえ、ミッション・スクールの使命と責任、高等教育のより良き在り方を模索して、その存在意義を賭けた改革への挑戦を続けていくこととなる。



国文専攻授業風景 1957年頃



国文専攻授業風景 1957年頃



英文専攻授業風景



英文専攻授業風景



入学試験/大講堂(のちに大学礼拝堂に改修) 1960年



試験の昼休み 1960年

II 拡大・充実期の青短とリベラルアーツ

児童教育学科の創設

久保 制一 (子ども学科 特任教授)

子ども学科の前身の児童教育学科がスタートしたのは、女子短期大学の開学から12年後の1962年度である。創設時は児童教育学科という名称で1学年50名定員であった。開学当初より文科(国文専攻、英文専攻)、家政科に合わせて児童科の開設も構想されており、校舎の建設一部完成と合わせて実現された。第1期の学生募集のため、各高校に配布された広告リーフレットにはラファエロの女庭師の聖母子像の絵画とともに以下のテキストが添えられていた。

こん日ほど 多くの人々が
子どもの教育と生活について
関心を示した時代はない

しかし子どもたちは
変動する社会と文化の流れの中に
その身と心をさらしている

子どもたちのいのちを尊び
そのまことの幸福を希いつつ
新しい子どもの教育と文化を
創り出そうとする力が
もっと強められなければならない

無限の可能性をうちに秘めている
子どもたちにこそ
私たちの社会の未来が
かけられているのだから

それまでの保育者養成の壁を打ち破る宣言ともとれるリーフレットの内容は半世紀以上を経た現在でも色褪せることのない理念と目標をかかげていた。それに共鳴し応募して合格した第1期生70数名での出発であった。その当時、従来の保育科・幼児教育学科の教育内容の傾向は幼稚園教諭の養成のみを目的として保育技術と卑近な保育内容の伝達が主軸になっていたが、本学では幼稚園教諭免許状の教職課程の科目の制約は在るものの、幼児の成長を見守り、子どものためのよりよき文化と社会的環境を作り出すことができる



リーフレット



授業風景 1966年頃



授業風景



授業風景 1980年頃

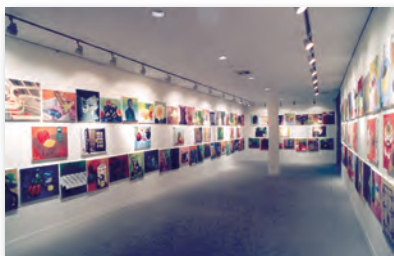
基礎的な力の育成と、人間的な成長の土台を涵養することを重視していた。その意味で、学科名称を乳幼児期のみ限定せず子ども時代を長いスパンで捉えるというコンセプトから『児童教育科』とした。

知性豊かなアカデミックな学問体系からの学びと感性を研ぎ澄ませる芸術系の学びとの融合による独特の教育は注目を浴びた。創設期の3-40代の若き気鋭の学者と芸術家による教員集団と学生の新しい学科での共同作業は、理想を高く掲げた情熱的な時空間の中で行われたと想像できる。少人数制の演習・実技の授業、講義、段階を踏んでの学外実習、多くの選択科目群など、丁寧で充実した教育計画の元にすすめられた。

1964年度には、専攻科が開設され、71年度には、専攻科までの3年間で保育資格（後に保育士資格）が取得できる保育養成課程を設置し福祉領域の充実を図った。多くの短大では、2年間で幼免と保育士が取得できる課程を作っている。しかし学外実習などで切れ切れになる上に過密な時間割りになるのを避けることと、夏休み・春休みは確保するとの方針で本科2年間では幼免のみ、専攻科までの3年間で保育士という青短独自の課程を作り出した。専攻科児童教育専攻の入学定員は1976年度に30名に、更に入学希望者増により2000年度に50名にして多くの学生の学びの継続を支援してきた。



児童教育学科 木の打楽器展 1984年



児童教育学科 2005 図画作品展 2005年



授業風景 1994年頃



授業風景 1995年頃



授業風景 2000年頃



児童教育学科発表会 1975年頃



児童教育学科発表会 1985年頃

II 拡大・充実期の青短とリベラルアーツ

国文・英文・家政の発展

鈴木 直子（現代教養学科日本専攻 教授）

文科国文専攻・英文専攻は 1962 年に国文科・英文科となり、1969 年に「科」から「学科」へと名称変更した。開学当時、国文定員50、英文100、家政100でスタートした定員は、受験者数増加に伴い漸増、1976 年には国文 200、英文 300、家政 200（2 コース計）の体制となり、青短の成熟期を迎えた。志願者数も爆発的に増え、1986 年には全学計 15,349 名を数えることになる。

国文は開学当初から、文学に限らず文化を広く学び、創作指導を重視する方針であり、1955 年度には「俳句創作」（加藤楸邨先生）「童話創作」（那須辰造先生）および「国文特別演習並論文」（1975 年には 8 単位に引き上げ）を創設、表現・情報発信力を重視する青短国文の教育の原点が形作られた。2000 年前後には伝統芸能やメディア系の科目が新たに加わり、日本文化を広く学ぶという学科コンセプトを明確にした。開学時からの研究旅行は、オリ旅行に姿を変え、国文の中心的行事として長きにわたり行われた。



入試発表 1971 年 2 月 23 日



国文学科オリエンテーション旅行 1985 年



国文学科授業風景 1994 年頃



国文学科授業風景 1995 年頃

英文は 1983 年度にカリキュラム改革を行い、1984 年度から英文学・英語学の 2 専攻制となった。英語の運用能力を高めるとともに、英語圏はもちろんアフリカ・アジアの地域研究など国際社会への視野を広げる意図が見える。エリザベス・クラーク先生のもと、外国人教員と日本人教員の協力体制はより深化し、1999・2000 年度には外国人教員によるコーディネート授業として ICE (Introductory College English) / INCH (Intermediate College English) を展開、英語力・教養・ディスカッション能力を総合的に身につける青短英語の新たなスタンダードを創出した。



英文学科授業風景



英文学科授業風景



英文学科授業風景 1997年頃



英文学科授業風景 1995年頃

家政は戦後の別館そして現校舎の南館も、領域ごとに実験実習室が完備され、充実した授業が展開されてきた。1966年度には生活の科学的理解を深めるコース、生活・社会・家庭の諸相を理解する生活デザインを主旨としたコースに科を分ける斬新なカリキュラム改革が島崎通夫先生を中心に行われ、家政学界の注目を集めた。1994年度にはコース制を廃止し「生活と社会システム」「生活と環境」「生活と文化」の三つの系に改編し、生活者としての新たな価値観と知識と実践力を身につけた人間育成の現代的展開に取り組んできた。



家政学科授業風景（調理学実習室）



家政学科授業風景（実材室）



家政学科授業風景 1999年頃



家政学科授業風景 1999年頃

II 拡大・充実期の青短とリベラルアーツ

教養学科の誕生と発展

八耳 俊文 (学長・現代教養学科人間社会専攻 教授)

教養学科が誕生した 1966 年 4 月前後は、青山学院がそして女子短期大学が大きな変貌を遂げていた時期であった。中軽井沢寮が完成したのが 1965 年 8 月、短大本館が出来たのが 1966 年 5 月、シオン寮が現在の猿楽町に移ったのが 1966 年 10 月、南校舎が建築されたのが 1967 年 4 月、1969 年 4 月には図書館棟、教育研究棟、青山学院講堂が完成し、ここに現在の女子短期大学の姿となった。この時に青短時代を過ごした学生は次々と現れる建物に新しい時代を感じたのではなからうか。

教養学科構想は短大の拡張計画の中で生まれ、1965 年 7 月 7 日の教授会で教養科増設が決定された。9 月 30 日には文部省に「教養科設置認可申請書」が提出され、「広い視野と高い識見をもち、文化の発展と社会の福祉に貢献する教養豊かな女性を育成」を目的に掲げ、人文・社会・自然の諸科目が備えられた。定員は最初 80 名、その後、100 名 (1968 年度より)、150 名 (1976 年度より)、140 名 (2001 年度より) と変遷した。初年度の入試では 1471 名の志願者が殺到し、その後も人気学科であり続け、一般入試の数字であるが 1986 年度に志願者 2388 名との記録が残っている。

新しい学科であり、新しい教員が集められ、学科には重厚さより活気が溢れていた。誕生時の学科主任は幸田三郎学長が兼任したが、学長自身まだ 40 代半ばであった。演習は、初年度は東洋思想史、西洋思想史、比較文学、教育学、心理学、社会学、人文地理学、住居学が設置された。その後も時代にあわせ多様な演習が開講され、その数は、順次増え、1985 年度以降は 20 近くにもなり、学生は豊かな教育を受けた。演習の最後は卒業論文の執筆で、この伝統は現代教養学科に継承されている。

他学科なら基礎科目が必修であることは理解できるが、教養学科の誕生時のカリキュラムをみると、1 年次に東洋思想史、西洋思想史、日本文化史、日本文学思潮、比較文学、現代社会と政治、現代社会と法律、現代社会とマス・コミュニケーション、教育学、心理学、社会学、人文地理学、住居学、英書講読、日本書講読が必修となっている。2 年次では西洋思想史、社会思想史、現代社会と経済、科学技術史、現代科学、教育学、英書講読が必修である。その後、必修科目は選択必修、選択科目と改められていくが、これらの科目を必修で学ばせようとした教養学科の熱い思いが伝わってくるようである。学生たちもそれについていったのである。

必修科目であるため全員学んだことから共通の体験として語られる授業がある。倫理学を専門とする小原信の「西洋思想史」である。『65 年史』文集編で学生から「ひたすらノートをとる」(1976 年卒業生)、「汗を拭く間もなく必死でペンを走らせ、課題のレポートでは毎回悪戦苦闘した」(1979 年卒業生)と記された授業である。小原信はこれに対し『50 年の歩み』の中で次のように述懐している。「『世界の名著』や『世界の大思想』を指定図書にし、レポートはいつもの原稿用紙コクヨケ 35 で全員に 50 枚、書かせた。その課題を発表した日、全員が教室の床を踏みつけてどれだけ抗議したか忘れることはできない。しかし、その難題をだれもがみごとにクリアしたのである」。コクヨケ 35 とは B5 原稿用紙横書 20×20 をいう。教員は手を抜かず、全力で授業に取り組み、学生は思いぎり 2 年間、学びに励んだのである。



教養学科設置認可申請書 (左:表紙、右:「目的及び設置事由」)

教養学科は 2012 年 4 月に現代教養学科が誕生したのに伴い、2015 年 3 月に廃止となった。49 年間、青山学院女子短期大学の第 5 番目の学科として存在し、卒業生の数は 7067 名に及ぶ。

学科の特徴として言われたのは「広く学び、演習で深く学ぶ」との言葉である。人文（A 思想と文化）、社会（B 社会と人間形成）、自然（C 科学と生活環境）の科目が多く配置されていたが、これらを漫然と履修しては「広く浅く」なるため、演習に所属して関連科目を修得すれば「深く」学ぶことになる、と説明したのである。

入学定員は決められていたが、入学者数は年により増減があり、その対応として演習が増して用意されることもあった。演習科目としては入学時の 1 年前期に教養演習があり、これは機械的に振り分けられ、1 年の後期から所属する演習は学生が選択することができた。ここで 1 年半勉学を続け、2 年の終わりに卒論を完成させた。演習の数をみると、1987 年度に最大で、1 年生後期に 20 の演習が開講されている。

それらを担当者とともに列記すると次のようになる。日本史（加藤晃）、西洋史（石引）、美術史（馬淵）、比較文化論（中井）、アメリカ文化（足立）、文学（塚本）、社会思想史（梅津）、法律学（中里）、経済学（菊池）、教育学 a（大蔵）、教育学 b（三宅）、心理学 a（外山）、心理学 b（金城）、心理学 c（米沢）、社会学（渡辺）、マス・コミュニケーション（武市）、人文地理学（鈴木敏）、住居学（加藤由）、情報科学（前園）、環境構成論（茂木）。教養学科の専任教員のみならず、他学科、学外の教員も加わり、演習が進められた。

展示の資料「蘭学事始」関連記念碑見学ツアー」は演習で実施した見学ツアーの文書である。注目すべきは金曜日 2 限の演習に昼休みの時間を使い、遠出をしていることである。1974 年度から 1995 年度まで昼休みは 12:20～13:40 と 1 時間 20 分あった。学校としてはまるまる昼休みとしたのではなく、週 3 回、礼拝の時間を間に入れたのだが、この長い昼休み時間を利用して学外に出かけることも盛んに行われた。

教養学科は誕生期には必修科目が多かったが次第に選択必修、選択となり、全員が同じ授業を受けることはなくなった。このため共通の体験がなく、学科への帰属意識が低い原因となっている。その少ない例外が入学時に実施された 1 泊オリエンテーションであろう。同行事はどの学科でも実施されたが、教養学科も 1966 年度の 1 期生から行われた。最初の中軽井沢寮、1972 年度からは大学の八ヶ岳寮が利用された。その後学生定員も増え、一般の宿泊施設が会場に選ばれるようになった。費用、施設の規模、安全などを考えると、東京では適当な場所を見つけることが難しく、南伊豆、御殿場、鴨川、箱根、横浜、蓼科など近郊の地の施設が選ばれた。展示資料は 2009 年度につくばで実施したときのしおりで、宿泊を伴ったオリエンテーションはこの年度が最後となり、2010・2011 年度は学内で開催した。

加藤由利子先生（住環境論）が退任にあたり『青山クーリエ』120 号（2001 年 4 月 1 日）で「教養学科は専門分野の異なる先生で構成されているため、その交流から得られるものは多大でそして楽しいものでした」と書かれているが、まさにその通りの学科であった。



演習風景 1993 年頃



授業風景 1996 年頃

Ⅲ 青短の教育を支えるキリスト教・図書館・寮

青山学院女子短期大学とキリスト教教育

吉岡 康子 (宗教主任)

キリスト教会の祈りから誕生した青山学院女子短期大学では、キリスト教信仰にもとづいた幅広いキリスト教教育が行われてきた。その中心は礼拝である。学内外の先生方や、学院近隣教会の牧師やクリスチャンの方々に説教・奨励をしていただき、たくさんの慰め、励ましをいただいた。礼拝堂は祈りと讃美の場として大切にされてきた。

夏と冬には「修養会」「キャンプ」「リトリート」が中軽井沢や天城山荘などで行われ、内外の講師を迎えて熱心な学びと、良き交流がなされた。

「キリスト教学」の授業は、キリスト教が持つ「豊かさ」「愛」「ゆるし」を理解し、キリスト教会が大切にしてきた信仰、文化を宝として受け取り、ひとりひとりが神さまに愛されたかけがえのない「大切な存在」であることの恵みをわかちあうことを目標としてきた。そうした教育理念を具体化したのが、2012年に新設されたサービスラーニング授業「キリスト教学実践」である。

「キリスト教学実践 A」では、「ハンセン病と地域社会」をテーマに、群馬県草津で宣教師が活動した「聖バルナバミッション」と、「日本のアウシュビッツ」と言われる重監房資料館などの研修をとおして、共生と排除の歴史と私たちの課題について学んだ。「キリスト教学実践 B」では、台湾スタディツアーを実施し、台湾教会の歴史と力強い働き、「原住民教会」の豊かさや文化の多様性、女性のリーダーシップ、大震災からの復興と継承などについて学んだ。

2011年東日本大震災発生後、『この時期だからこそ『私たちにできること』に真剣に取り組み、『地の塩、世の光』として生きることを考えましょう』との呼びかけに応えた学生たちにより被災地支援ボランティアチーム Blue Bird が組織された。泥出しやがれき処理などから、地域交流、学習支援、ハンドベルによる追悼式演奏奉仕など、現地のニーズに合わせた多様な活動を展開してきた。

2016年熊本地震においても BlueBird は活動した。現在まで延べ 400 人近い学生が被災地に派遣されたが、そ



オンギジャンイによる賛美礼拝



サマーキャンプ (中軽井沢) 1995年頃



「キリスト教学実践 A」(草津・重監房資料館) 2018年



「キリスト教学実践 B」(台湾・霧社事件記念公園) 2016年



東日本大震災被災地支援ボランティア活動 (岩手県宮古市) 2011年

の主管は宗教活動センターだった。被災地での活動は本学の「愛と奉仕」の理念を実現する時・場となった。

宗教活動委員の学生たちの活動としては聖歌隊、ハンドベル、ゴスペルなどが行われてきたが、現在は、ハンドベルと讃美で礼拝での奉仕や被災地でのボランティア活動を行う「グロリアス・クワイア」と、聖書を学び、祈り、賛美を合わせる「ろばのこ」が熱心に活動をしている。



熊本地震被災地支援ボランティア活動
(熊本県南阿蘇) 2016年



ろばのこ



グロリアス・クワイア (宮古市東日本大震災追悼式) 2019年

宗教活動の記録誌『みずさき』

『青山学院女子短期大学 65 年史』第六章 宗教教育と宗教活動 第四節 模索する宗教教育 より

創刊以来、学内の宗教活動の素朴な記録誌であった『みずさき』は 1991 年 12 月発行の第 46 号より年 1 回の発行となる。この後宗教活動委員会発行による『みずさき』は大きく編集方針とスタイルを変えた。従来、夏・冬の修養会の記録にとどまらない本学の宗教教育・大学教育方針の総括を内外（学生・保護者・卒業生・キリスト教学校教育同盟加盟校）に伝える広報誌として、その年度の宗教関係行事すべての概要・教員による個別教員インタビュー・教員間の座談会・学生による取材記事・投稿などを載せた充実した内容の冊子に生まれ変わっている。(p464)

2004 年度には毎週発行されている「礼拝週報」の裏面に印刷された短大教員と学院関係者が執筆する「今週の言葉」というエッセイが当該年度の『みずさき』にまとめて掲載されるようになった。(p469)

2011 年度の 66 号から東日本大震災被災地支援ボランティアの活動報告を掲載するようになり、“青山学院創立 140 周年記念事業 東日本大震災被災地支援 宮古応援プログラム「ALL 青山ボランティア活動」特集号」とした 2014 年度の 69 号からは、被災地支援ボランティア活動の記録となった。



『みずさき』創刊号 冬期修養会の報告 (左) 1967 年
2 号 夏期修養会の報告 (右) 1968 年



『みずさき』66号・69号・73号

Ⅲ 青短の教育を支えるキリスト教・図書館・寮

青山の外のキャンパス – 中軽井沢寮とシオン寮

鈴木 直子 (現代教養学科日本専攻 教授)

中軽井沢寮

中軽井沢寮は1965年に竣工、2013年に老朽化によって閉寮となるまで48年にわたり、サマーキャンプなどさまざまな行事に利用されてきた。

青山キャンパスを離れた場所で修養会などをするための「山の家」が欲しい、との話は1959年ごろからあったが、折しも始まった(株)星野温泉(現在の星野リゾート)の中軽井沢開発に伴い、「格安に土地が購入」できたとのこと(『六十五年史』通史編)。

竣工翌年の1966年5月18日から26日にかけて、新入生オリエンテーションが行われた記録が、『青山学院女子短大新聞』第81号(1966年6月20日発行)にある。「国文科を除く一年全員と、学長をはじめとするクラスアドバイザーが参加して行われた」とあり、英文・家政・教養、そして1966年に初めての新入生を迎えた児童教育学科の全ての新入生が、中軽井沢寮に代わる代わる集まったことになる。新聞には一年生と思しき無署名の記事が載り、文面から、この催しの大成功であったことがうかがえる。

「(友達との語らいに)「そんな風にも考えられるのか」とか、うれしい発見をしたと同時に、お友達に急に親しみを覚え、この二年間、仲よく勉強していけるといいう強い確信を持ち得たのである。」

「寮は実にきれいに掃除されていて、食事申し分なく、その上、寮のまわりの環境は、ホトトギスの鳴き声が聞こえたりする程、静かで素敵だった。一泊で帰ってしまうなんて本当に惜しいというのが、偽らざる私の実感であった。」

中軽井沢寮ではその後、宗教活動委員会主催で、夏期・冬期の修養会が行われた。冬期はのちに天城に会場を移したが、夏の修養会は、1977年からは「中軽井沢夏期学校」、1987年からはサマーキャンプイン軽井沢と名前を変え、2012年まで、毎年夏に開催された。その他、ゼミ旅行やクラブ活動、友人とのプライベート旅行など、青短の夏の思い出の地として、今も多くの同窓生の心に深く刻まれていることだろう。

惜しまれつつ閉寮となった中軽井沢寮を2014年、奥村健一元教授が撮影して動画を作成し、門柱を八耳俊文学長が青山の本学に持ち帰った。今回この門柱も、子ども学科・久保制一先生の工夫により、展示されることとなった。



『青山学院女子短大新聞』第81号



寮外観



食堂



門柱 1989年頃

シオン寮

戦前、渋谷の校地にあった学生寮は1945年5月25日の空襲で全焼していたが、1951年5月、女子専門学校時代の寄宿寮が再建され（現・渋谷区渋谷2丁目）、金王寮として開寮（収容定員69名）、翌年2月、新約聖書の「シオンの娘」にちなみ、当時学生部長だった馬越宮先生によって「シオン寮」と改名された。これがシオン寮の始まりである。その資金には、戦後日本の女子高等教育の必要性を見越していた米国メソジスト教会婦人部からの寄付が充てられた。その後1966年に、手狭で老朽化した金王町の建物から現在の猿楽町に移転。定員も248名に増え、地方出身生のもう一つのキャンパスとして青短の教育の一翼を担うことになる。

青山学院の女子教育に通底していた全寮制教育の理念を引き継いだシオン寮は、1978年度に短大教員組織としてシオン寮運営委員会が設置されることで、単なる宿泊施設ではなく、キリスト教主義の教育寮であるという位置付けをより明確にした。朝拝・夕拝、クリスマス祝会、多くの行事が寮生の活動として行われ、寮生たちは互いに生活とともにしつつ、自主性や社会性を培っていった。以下、寮生活の思い出の一端を、本学総合文化研究所編『シオン寮半世紀の歩み』（2004年）よりいくつか引用したい。

「一九五〇年代後半のシオン寮は外国映画ファンの私にとって「寮」と云うよりは「寄宿舎」、「寮母さん」と云うよりは「舎監さん」と云った方がしっくりするような、古き良き時代のヨーロッパ映画の世界という印象です。」（1959年卒A.Eさん）

「キリスト教の朝の礼拝と賛美歌に始まる一日のスタートはとても清々しいものでした。眠い朝もありましたが、心が洗われるような聖書の言葉に救われる日も多くありました。オルガンの音がいまでも蘇ってきます。」（1980年卒K.K.さん）

卒寮生たちは「シオン寮の会」（1980年発足）に集い、2年毎の総会と「シオン寮だより」の発行を現在まで続けてきた。今後は同窓会の一組織として活動を続けていく予定である。

たくさんの地方出身青短生が青春の時を過ごしてきたシオン寮は、2020年3月をもって閉寮となる。2019年9月7日、最後のシオン寮ホームカミングデーがシオン寮で行われた。午前には1988年までの卒寮生、午後にはそれ以後の卒寮生が計約650名集い、思い出話に花を咲かせてシオン寮との別れを惜しんだ。



第一寮（金王町）外観



第二寮（金王町）外観



シオン寮外観

Ⅲ 青短の教育を支えるキリスト教・図書館・寮

図書館の誕生と発展

堀川 照代 (現代教養学科人間社会専攻 教授)

当初、短大の施設そのものが本館と別館の2棟のみの時代には、図書館は、本館2階に図書室があるほか学院全体の中央図書館である間島記念図書館を共用していた。学生数の増加により1960年代に本館(新)、南校舎などが新設され、図書館棟は1969年に教育研究棟、講堂とともに建てられた。

1969年に建てられた図書館棟は蔵書10万冊が収蔵予定だったが、蔵書の急増により書庫内の倉庫や空スペースに書架を増加しても間に合わず、1981年に図書館将来計画委員会を設け検討を始めた。その委員会の提案によって、演習室をAVルームに改造して視聴覚資料が提供され始めると、ビデオの利用は常に利用者の数倍の利用希望者がいるほど好評を博した。1985年春に図書館増築の設計が決定し1986年に新図書館が完成、コンピュータが導入されて、現在の図書館の姿が出来上がった。

本学図書館の蔵書数は短期大学のなかで突出したもののだが、さらに特色を出しているのが5つのコレクションである。「讚美歌の初版本」、「榎崎文庫」(浮世絵研究の第一人者であった榎崎宗重先生の寄贈書)、「オーク・コレクション」(英米の絵本と児童書)、「幕末・明治の外国人の見た日本」コレクション、「1850年以前に刊行の中国に関する欧文図書」コレクションがあり、これらの貴重書はギャラリーでの展示やトークによって折々に紹介されてきた。

貴重書室の場所をご存知だろうか。この貴重書室と絵本室について、青山学院大学の福岡伸一教授が「な



図書館外観



図書館内部



オークコレクション (図書館発行の図録より)



コレクション展ポスター

くなる青短、蔵書に未来を」と題して朝日新聞（2017年12月14日 朝刊）のコラムに次のような文章を寄せている。

（前略）三角形の建物内に入ると一瞬、方向感覚を失う。地階の書庫へ降り狭い階段を下るといりくんだ書棚が連なっている。古い皮装のユゴーなど貴重書コーナーも。ウンベルト・エーコの『薔薇（ばら）の名前』に出てくる迷宮図書館みたいだ。

私が好きなのは迷路の一番奥。両側に、三島由紀夫や宮本百合子全集が壁のように立ちはだかる狭い回廊の突き当り、その先に窓のない洞窟がある。実はそこは秘密の花園。ぎっしり絵本だけの部屋なのだ。（中略）

雑誌コーナーもよい。一般誌のほか「日本栄養・食糧学会誌」や「婦人之友」もある。そうなのだ。女子短大が担っていたのは幼児教育や家政、栄養といった大切な学問上のディシプリン。その知的アーカイブとしての図書館の行く末を見守りたい。

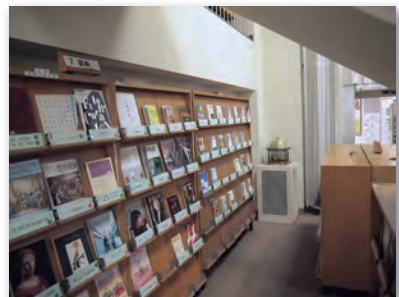
細やかな選書によって育て上げられてきた本学蔵書は誇るべきものである。この知的アーカイブは、今後、大学図書館の蔵書と統合されて、さらに大学教育の知の基盤となっていくことだろう。



貴重書室



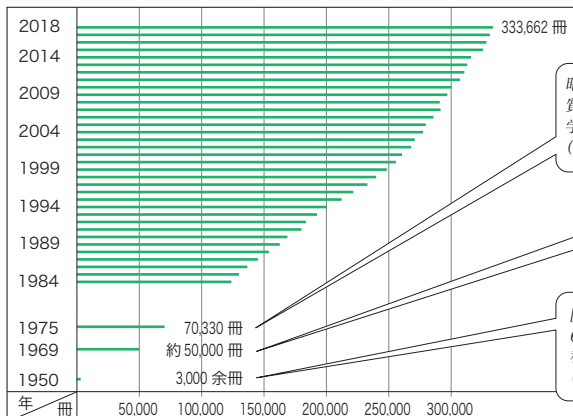
絵本室



雑誌コーナー

蔵書数の変化

蔵書数は1988年度より図書館が刊行する年次報告書による
(1984~1987年度のデータは1988年度の年次報告書に記載)



昭和50年5月1日現在の蔵書数は図書70,330冊
質量ともに短期大学図書館としては群を抜き、四年生単科大学に比べてもその上位に位置に至った
(出典：『青山学院女子短期大学の歩み』昭和50年11月発行)

1969年(昭和44年)には「青山学院女子短期大学図書館」が完成し、蔵書数は5万冊であった
(出典：2004年度年次報告書)

開学当初、本学専用の施設の蔵書数は3千余冊
6万余冊を蔵する間島記念図書館が短期大学に隣接し自由に利用できたから、教育上の支障は無かった
(出典：『青山学院女子短期大学の歩み』昭和50年11月発行)

IV 青短の新たな挑戦

3年制子ども学科への発展

横堀 昌子 (子ども学科 教授)

「子どもは人間の原点。子どもを真摯に考えることは、人間を真摯に考えることです。また未来ある子どもを考えることは、人間社会の未来を考えることです。子ども学科は、こうした人間の原点点としての子どもを座標軸の中心に据えて、3年間の有機的カリキュラムにより『人間とは?』『社会とは?』の問いをゆっくりじっくり考え、学んでいこうとする学科です。」「子どものまなざし、子どもへのまなざしを通して、人間と社会を深く学びます」。

こんな言葉を掲げ、2006年4月、新たな歩みが始まった。第1期生募集パンフレットの表紙には、青々と葉を茂らせ、すくと空に向かってのびやかに立つ樹木の写真を採用。これは、子ども学科が決して一からの新たな芽吹きではなく、これまでの児童教育学科の歩みの上に続くものであり、教育理念は何ら変えるものではないとの意思の表れであった。写真にはキャプションを添えた。

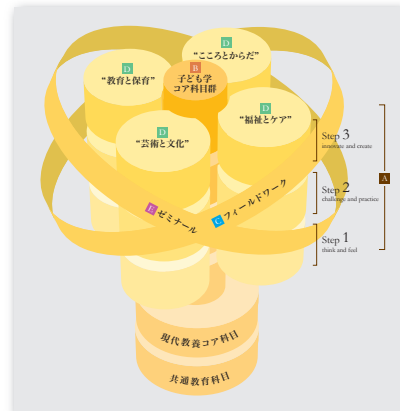
「Treeはtrueに通じる。Trueはもともと、treeのようにしっかり大地に根をはって、ゆるがない、という意味だった。私たちの学科も樹木のようにでありたいと願う」。菅沼(清水)眞砂子教授(当時)の言葉である。激しく変動する社会にあって、時代の要請に応えつつも、ものごとの本質をしっかりと見きわめ、人としてたしかな歩みを続けていくためにせめて3年間の学びの日々を、との思いをこめた。

「“子ども”を通して“人間”を探究する」「広く深い視野で自ら考え、創造する」「愛と奉仕の精神をもって、社会に生きる」。学科の3本柱だ。卒業時には幼稚園教諭2種免許状、保育士・司書資格が取得できるが、それらは教育のひとつの成果と位置付け、目標そのものとはしない。単なる保育者養成ではない教育をつくりたい。「本物に出会い、本質を問い、自分を育てよう」。「子ども人間学」探究の旅が始まった。

学びのデザインには、アメリカの複数の伝統的な女子(女性)大学研究から得た着想が活かされている。学科の核となる考え方をじっくりと学び、人間理解を深め感性・知性を耕すコア科目群(必修)。第一線で活躍する大人たちから刺激を得て、自分はどう生きるかを問う。他者とどうつながりケア社会を創っていくか考える。そんな物語を底流に流した(「ワークショップ人間と表現」「子ども人間学概論」「子どもの文化と現在」「女性・環境・平和」「いのちとケアの人間学」)。



子ども学科パンフレット



子ども学科の学びの構造



授業風景

豊かな選択科目をくぐりステップアップしていく学びの構造（“think and feel”，“challenge and practice”，“innovate and create”の3ステップ）も連動する。感じ・考え、挑戦し、革新する。よりよいものを、何もないところからでも創り出せる人に。子ども学科からは保育者をはじめとより芸術分野ほか、多様なフィールドで活躍する人を輩出している。

「子どもにかかわる大人は幅広い教養を備えた人であってほしい」「魅力的な大人（女性）としてまずは自分をのびやかに育ててほしい」。教員との人間的なまじわりも得る1年次からの少人数ゼミナール。主専攻・副専攻も導入。2・3年次所属ゼミの専門領域を主専攻とし、こだわりをもてる力を後押しした。基盤となるのは「教育と保育」「福祉とケア」「こころとからだ」「芸術と文化」の4つの専門科目群である。芸術家らが学科創設以来刻みこんできた創造性を育む文化。学生たちが毎年オリジナル作品等の発表をしてきた学科行事「子ども学科発表会」にもその輝きが放たれてきた。卒業研究の発表会でも、論文や芸術作品制作の成果が多彩に花開く。

自己と向き合い人間や社会を探究する実習プログラムは、時に学生の人生を変える。さらにプレーパークや自主保育等に出会えるフィールドワークも展開してきた。

2014年4月には1年制の認定専攻科（定員30名）を設置、4年目の学びを可能にした。修了時には、大学改革・学位授与機構に学習成果の論文を提出、試験を受け合格することで4年制大学と同等の学士（教育学）、幼稚園教諭1種免許状が取得できる。希望者は夢をかなえ、多様な進路をひらいている。

学科の理念は在学生・卒業生の中に息づいている。一人ひとりが暮らし、働く場で、何を大事に考え、生きるか。この学科で灯しあった光が、自らと自らが出会う人たちの心を照らし、希望を広げていけるよう祈りたい。今もそしてこれからも。



授業風景



学外授業風景



子ども学科発表会



特研発表会（作品発表）



特研発表会（論文発表）

IV 青短の新たな挑戦

芸術学科の挑戦

趙 慶姫（現代教養学科人間社会専攻 教授）

芸術学科は第6番目の学科として1989年に誕生した。その経緯については創設に関わった田島俊雄教授（当時）が、1995年3月発行の「芸術学科だより1」に随筆「この十年」として詳しく書き記されている（パネル参照）。そこにあるように「造形行為の実践と理論面を同次元で統合させた、他のどこにもできない総合的な教育を」という高い理想のもと、定員40名という小人数で密度の濃い学科が誕生した。キリスト教による人間理解を根底におき、開設前年に公布したパンフレット（展示参照）には「芸術創造行為を通して人間を探求し、また人間を深めながら芸術を創造しようとする」に始まる設立趣意文を掲げた。

美術理論や造形表現を通して芸術を理解するため、理論と制作をバランスよく学ぶことを目標とした本学ならではのカリキュラムは、一般の文学部系の大学や芸術系の大学と異なるユニークなものだった。理論には「芸術人間学」を中心とする美学・美術史・芸術各論の科目を、制作には「構成Ⅰ・Ⅱ」という実技科目を設けた。1年次に総合的に基礎を学び、2年次で専攻を選択し、卒業研究で作品または論文として仕上げ、卒業展で発表する。分野は制作系として絵画・彫刻（2005年からは構成Ⅰのみ）・デザイン・織（1997年までは染織）、論文系の美学・美術史の六つ。

設置認可申請に提出された「設置の趣旨及び特に設置を必要とする理由を記載した書類」に、学科の特色として、実習関連科目を「構成」という名称のもとに、実技、実習の科目を総合して履修させる」とあり、この「構成」の概念について「附表」のあとに「本学科の「構成」について」として詳記している。そこから一部を抜粋する（…は省略）。

（引用：青山学院女子短期大学六十五年史-資料編）

現在、絵画・彫刻・デザイン・工芸等の造形芸術全般をとらえようとするとき、従来の概念によってはもはや難しくなっている。

・・・近世以降にはその各々の専門分化が進み・・・今日では、そのような専門分化の行きづまりが、さまざまな形で見られるようになっている。いまこそ芸術の本質的な意味の究明と、芸術が果たすべき役割の確立がなされなければならない時と思われる。

「構成」とは、・・・時代精神や社会のながれに対応して芸術の新しい総合化をめざすとき用いられてきた概念であると考えることができる。

本学科における「構成」は、時代に対応する複合・総合をめざして芸術創造をおこない、多様な要素を組織して作品を産む創造のプロセスそのものをあらわす用語としている。・・・この「構成」による芸術創造が、単に技術的訓練におわらず、精神を活発にし、きたえ、ゆたかな人間性の発達に役立つことを期待している。



オリエンテーション旅行（箱根 彫刻の森美術館）



絵画 授業風景



彫刻 授業風景

「構成」では、1年次前期に全員が制作系3～4ジャンルの基礎を一通り学び、後期にはその内の二つ、2年次に一つに絞り込む。卒業研究で論文を選択した学生も2年次前期までは「構成」を履修する。

学期末には試験として「構成」の全体講評会が行われた。専任教員と実技を担当する非常勤講師全員が着席する前に、一人の学生がその学期に制作した全作品を制作順に並べ、教員一人ひとりが学生に対して作品と半期の学びについてコメントし、その場で採点する。夢中になって制作に取り組んだこと、気が入らずに形だけ仕上げたこと、自分自身に向き合った時間の長短・密度が作品には正直に表れる。時には教員同士の主観の違いからストレートな発言の応酬もあり、学生にはもちろんのことだが、教員にとっても緊張する時間だった。

2011年度入学の23期生まで、約1020名の卒業生数は短大卒業生総数のごくわずかな割合に過ぎないが、専門家を育てることを目標としていないためクリエイティブな仕事・活動をしている卒業生が多くはないものの、その生き方の多様さにおいて、大人数の学科に引けを取らないのではないだろうか。2年間、専攻科に進学した学生は3年間、芸術のシャワーを全身に浴びたことが、一人ひとりの生き方に大きく影響し、豊かなものになっているに違いない。

2012年度の改組に伴い創設された全学科共通の現代教養コア科目、第三群「表現」に〈造形〉ジャンルを、卒業演習に造形系ゼミを設けた際、織とデザインのみで絵画や彫刻のファインアートがないため「芸術」と名付けることはしなかったが、より多くの学生に対して創造行為の機会が用意されたことで、芸術学科の精神が最後まで引き継がれたと言えるだろう。



講義 授業風景



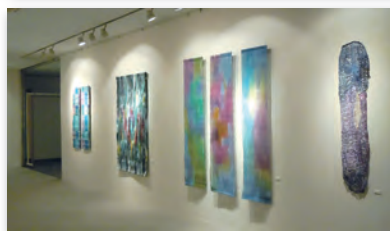
全体講評会



芸術学科展（短大ギャラリー）



ヌードデッサンの講評会



2009年度 卒業展（上）・修了展（下）

卒業生の皆さんお元気でしょうか。短期大学で過ごした生活は無垢なものであっただけに、あるいは実社会で悪戦苦闘の日々が続いているのかもしれない。

学院は昨年、創立120周年の記念行事が行われましたが、本学科も設立してから6年が経過し、5回目の卒業生を送るに至っています。学生の入学、卒業の度に、ある種の感謝を新たにしますが、この歳に芸術学科創設時のことどもを、私事として語るのも無意味ではあるまいと思う次第です。

今から10年程前のこと、故あって地方の公立大学から本学の家政学科に就任して7年、そろそろ本格的に腰を据え、私的な仕事の方もある程度方向が見えてきた頃でもありました。前期も終りに近づいた梅雨明けの或る日、前学長の鳥嶋先生が一服しに研究室に見え、会話中にそれとなく「本学に芸術学科をつくってはどうか」と唐突な発案をされたのでした。これが私と本学科との最初の関わりとなるわけですが、その時は家政学科の問題も一段落して、私的な制作の問題も含めてこれからという状況でしたし、また本短大教育のなかに芸術学科を位置付けるのはあまりにも特殊であり過ぎると思えましたので、その案をまったく考えるに値しないものとしてやり過ぎたものでした。

その頃、社会的には18才人口の増で文部省から定員増の働きかけもあり、学長としては単なる定員増を避け、何か本質的な意味で本学を活性化させることを考えての発案だったのでしよう。伝統的に社会的評価は安定したまま、内容的にも充実しているかに見える本学も、実は少々マンネリ化していて何か新しい方向づけをまぎさる空気は漲っていたように思います。なにかを模索しているという時は、学内も共通の意識のもと、良い意味でのある種の緊張感があり、私も家政学科内の改革にとりくんでいるところでした。

その後、二度三度と学長が見える度に同じ事が話される内に、漸次、これも時代の要請というものだろうかと考えるようになり、私事のこととはともかく、本短大の一大転機をはかる事業をやるだけの意義ありと判断し、翌85年6月の将来計画委員会との懇談会の折に、新学科増設の提案を発議したのでした。当時、父兄後援会長をお願いしていた澤田先生の温かいご支援や、それまでも何かと頼りにしていた掛井先生の積極的な意向も加わり、早速、何度かの新学科構想懇談会がもたれ、その夏の休暇より加藤前事務部長の協力のもとに、全国的美術系学部・学科をかかえる大学、短大の調査と、本学での具体的な可能性についての検討が開始されました。

資料を集めて考察した結果、教養系・専門系を含めて、本学のとるべき規範となるような教育機関の無いことを改めて知ることにもなりました。一方は単に形式を整えただけに見える平板な教養系、他方は極端に専門の細分化された職能教育といった具合で、いずれも参考にはなりませんでしたが、逆に本学のとるべき方向が増々明確化していったということもできるでしょう。

私は、いわば造形することによって自らの生を得ている人間の一人です。造形行為を通して得ることの大きさを知る者として、つくるべき学科は、形式的なおり一遍の形でない造形行為の実践と理論面を同次元で統合させた、他のどこにもできない総

合的な教育をこの青山ならではの形で実現させるというものでした。そのような学科でなければ実現させる意味無しという考えの基に、施設を含めた具体的な可能性についてレポートをまとめ、休暇明けに学長に提出しました。施設的には狭いキャンパス故、殆ど絶望的でしたが、何も無くとも理念が支え得るとも確信していました。

その年の10月、このプランは教授会の議を経て、いよいよ公的に平井先生を委員長として新学科構想委員会の設置に至り、その中で更に長い時間をかけてカリキュラムを含めた具体的な構想が組み立てられ、86年3月、この委員会は芸術学科準備委員会へと発展し翌年、発足を前に橋本、馬淵両先生も迎え、備品、図書等を含めた細密にわたる準備が全て整えられました。

その間、学長の3年あまりに及ぶ必ずしもスムーズでない文部省との折衝を経て、88年12月、ついに認可がおり、翌年4月、芸術学科の誕生にこぎつけたのでした。前年に公布された新設芸術学科のパンフレットは、掛井先生のアイディアによるアンリ・ルソーの楽譜にブランクーシの彫刻をあしらったデザイン、そして平井先生による「芸術創造行為を通して人間を探索し、また人間を深めながら芸術を創造しようとする」に始まる設立趣意文の揚げられたものでした。

私たちは青山なればこそその理念に燃え、第一期生を迎えました。第一期生の皆さんには、入試の時や入学時にそのような生の熱気が或いは伝わったかもしれません。学生も教員も夢中で過ごした時の記憶は未だ鮮明です。その後6年、教員、副手の移動は多少ありましたが、学科の理念そのものは何ら変わる所なく今日を迎えています。

私自身、この学科との関わりの中で多くの得難いものを得たように思います。それまでとは違った芸術関係専門の先生方との接触により得た新鮮な刺激、そして芸術としてのデザインの位置づけや方向について改めて勉強させられたこと、またライフワークたる制作に於いても新しい問いかけが始まっています。

現在、芸術学科発足時の社会状況は逆転して、18才人口の減により私大は冬の時代に入りつつあると言われています。しかし、当学科は他の傾向とは無関係に増減を繰り返すという面白い現象が見られます。人間の本性は不遇的で時の流れを超えた所に基底を置く芸術の特性によるのかもしれない。

今後も、本学は時代と共に変遷を重ねてゆくことでしょう。時の要請とは、流れの表層に対応するということではなく、より本質的な内に向かったものであるはずだと思います。皆さんの人生にとって、芸術というものが、現在、また今後如何なる意味を持つに至るかはわかりませんが、私は、常に今現在を真に生き、そして人間の真の豊かさを探索し続ける人の育つことを想いつつ、今日も短大の中に在ります。



IV 青短の新たな挑戦

現代教養学科の誕生と現代教養コア科目

鈴木 直子 (現代教養学科日本専攻 教授)

21世紀に入り、本学は改めて、現代社会に即した新しい教養教育のあり方を問い直し、質を深める試みに踏み切った。2009年に新学科設立準備委員会が結成、国文・英文・家政・教養・芸術の5学科を「教養」を軸に統合し、日本・国際・人間社会の3専攻を設けるという構想のもと、現代教養学科が2012年4月にスタート、新入生オリエンテーションでは、世界で活躍する青短の先輩3名を招いてシンポジウムを行い、新学科の誕生を祝った。



新入生オリエンテーション 2012年4月

その中核として創設されたのが「現代教養コア」科目群である。この科目群はそれまでの共通教育科目「主題科目」に代わり、全学共通の科目として設けられた。

女性たちが新しい時代に生きぬく力を得てほしいとの願いを込め、現代に生きる女性としての自己を知る(第Ⅰ群「女性と現代」)、他者とつながる(第Ⅱ群「共生」)、自ら動き伝える(第Ⅲ群「表現」)の3群で構成され、ワークショップやサービスラーニング科目も豊富に設けられた。1980年代にエリザベス・クラーク先生によっていち早く導入された女性学を発展させたジェンダー科目群、平和学の科目群、児童教育学科やキリスト教活動などで早くから繋がりを持ってきたアジア学院や共働学舎などに加え、沖縄・カンボジア・バングラディッシュなどへのフィールドワーク、芸術学科の伝統を活かした造形ワークショップ、国文学科の伝統を活かした創作科目群など、青短の教育の歴史と現代的課題・教育法が会う。アクティブなキリスト教女子教育を行ってきた本学ならではの、ユニークかつ実践的な教養科目群である。



エリザベス・クラーク先生



「女性と現代特論C」
駐日アイスランド大使による講演学内掲示ポスター



「共生社会実習D」カンボジア・スタディ・ツアー



「造形ワークショップA」



「共生社会特別演習」沖縄を学ぶ旅

現代教養学科生は、入学直後、オリエンテーション期間に「現代教養コア入門」という集中講義授業を全員が受講する。

「女性にとって大学教育は必要だと思う？」という問いかけに始まり、女性への高等教育がいかに拒絶されてきたかの歴史を学び、また現代中国のデニム工場で低賃金労働を強いられる少女たちを取材した映画『女工哀歌』（ミカ・ペレド監督、2005年）鑑賞を通じて世界の女性たちの現状を学ぶ「女性と現代」分野。「幸福」の条件や「善きサマリア人」の問いかけを通して楽しい共生空間を共有する「共生」分野。画像比較、身体エクササイズ、物語作りなど、造形・身体・言語を通じて自分と対話し他者に働きかける「表現」分野。

ディベートやグループワークといった授業スタイルの体験、ボランティア活動やスタディツアーに参加した先輩学生らによるプレゼンテーションなど、入学したての学生に大学ならではの自主的な学びを印象づける。現代教養学科の全入学生が同じ教材と授業を学ぶことで、極めて有効な初年次教育の実践となった。

現代教養学科では全員が、1年次前期の学問入門演習、後期の専攻基礎演習、2年次の卒業演習と、2年間を通じてゼミに所属し、卒業論文または卒業制作を提出しなくてはならない。調べ、考え、書き、伝えるという行為そのものが、現代を生きる教養の核になるとの考えにもとづく。卒業論文・制作は、ゼミごとの論文集や作品集としてその全てが保存され、共有されている。2年次の最後には卒業演習発表会として論文発表、作品展示を行い、成果を披露している。



現代教養コア入門 2013年4月



現代教養コア入門 2017年4月



卒業演習発表会 2018年1月



卒業演習発表会 2019年1月

IV 青短の新たな挑戦

現代教養学科 3 専攻の特色

鈴木 直子（現代教養学科日本専攻 教授）

日本・国際・人間社会の各専攻は、新しい時代の教養教育を目指し、それぞれオリジナルな活動を展開した。

日本専攻は「読む」ことを教養の基礎に据え、特別科目「読解トレーニング」において新聞記事から歴史を繙き、沖縄の小説を通して文化的他者を知るといった経験を経た上、文学・歴史・社会・文化・メディアなど日本を多角的に学ぶカリキュラムを構築。2014年度からは課外プログラムとして「日本を感じる！ワークショップ」を年数回企画、「夏までに浴衣を一人で着る」のほか、邦楽・和菓子・香道など五感で日本を学ぶワークショップを提供、2019年度は公開講座「沖縄古典芸能入門」も実施した。

国際専攻は英語を教養の核と考え、旧英文学科のICE (Introductory College English) / INCH (Intermediate College English) を引き継いだ英語教育に力を入れるとともに、英語圏を中心とした世界の文学・文化・国際関係・共生などを幅広く学ぶカリキュラムを構築。学科主催の「学内英語スピーチコンテスト」は2018年12月が最終回、英文学科時代以来36回の開催となった。

人間社会専攻は、心理学・教育・法学・経済学など幅広い学問分野を横断的に学ぶ課題解決型の教育を意識し、テーマに即して学ぶオムニバス授業「人間社会研究」を全員が受講、一方で1年次後期から卒業論文までゼミを固定することで専門性を深める。また1年次に専攻オリエンテーションやゼミ対抗のウルトラクイズ大会などを行い、学びの動機づけと学生同士のつながりを大切にしてきた。

青山学院大学新学部構想が提案されるなか、現代教養学科は2018年度を最後に学生募集を停止、在校生の卒業をもってその歴史を閉じることとなる。

青短の歴史や存在意義は「キリスト教信仰にもとづく女子の教養教育」にあるとの共通理解に基づき、現代社会に即した新しい教養のかたちを模索してきた現代教養学科の挑戦とその意義は、卒業生のなかに生きた経験として残り続けることだろう。



日本専攻 日本を感じるワークショップ



国際専攻 INCH 授業風景



人間社会専攻オリエンテーション

1940 年代

第一章 女子短期大学としての再出発 (1949-59 年) 第一節 戦後教育改革と青山学院女子専門学校より

新館・本館の建築

戦災ですべての校舎を失った本学が戦後に最優先すべきことは校舎の再建であった。・・・検討の直接的契機は、米国のメソジスト監督派教会女性海外伝道協会から寄贈金が届いたことである。47 年 6 月、これを基金として、まず女子専門学校家政科の授業に必要な特別教室 4 室（裁縫教室・割烹教室・理科教室・同準備室）の「新館」（49 年秋に「本館」が完成した後に、「別館」と呼ばれるようになる）を建設する計画が法人理事会で決定された。その後、相次ぐインフレや物資不足などにより、48 年 3 月にようやく着工に至った。

こうして 48 年 10 月下旬「新館」がようやく完成した。これにより、学院本部と高等部から借りていた 16 教室のうちの 10 教室を返還しなければならなくなった。・・・教室不足は一向に解消せず、すぐに新校舎（49 年秋に完成後、「本館」と呼ばれるようになる）を建設する必要があった。(pp.42,43)

1960 年代

第二章 新学科の設立と新たな展開 (1960-75 年) 第三節 教育研究環境の整備 より

学生食堂

1950 年の開学以来、短期大学には独自の学生食堂が存在せず、・・・学生側より不満の声が上がり、1959 年には学友会から向坊長英学長に対して短大食堂建設の要望が出される。・・・同年挙行された青山学院創立 85 周年記念事業の一環として、学生食堂（正式名称は学生ホール）が建設されることとなった。(p.136)

・・・しかしながら、62 年に児童教育科、66 年に教養科が設置され学生数が増加していくと、この学生ホールのみでは到底対処しきれなくなり、「入口から押すな押すなの混雑でまるで通学時の山手線のように」と、その混雑ぶりに学生側から再び不満の声が上がるようになる。これに対して本学は翌年度から昼休みの時間を 50 分から 1 時間に延長するなどの対応を行っている。(p.137)

新校舎・図書館・講堂の建設

短期大学発足以降 1955 年までの本学の専用施設は、49 年に建設された本館と 48 年に建設された別館の二棟のみであった。・・・青山学院理事会は 1958 年 12 月、学院の南に隣接する 3000 余坪の土地を購入して初等部を移転し、初等部の跡地に短期大学を移転させることを正式に決定した。それに先立ち、初等部校舎の西側に接続する形で地下一階・地上四階建ての新校舎を建設することとなった。

・・・66 年には管理部門を収容する本館が新築され・・・翌 67 年には南校舎が完成し、・・・地下一階には学友会の部室も設けられた。

1969 年には、教育研究棟・図書館棟・講堂の三棟が完成した。・・・こうして 1960 年代には現在の短期大学の校舎の多くが建設されていったのである。(pp.137,139)

1980 年代

第三章 短期大学の充実と模索 (1976-89 年) 第六節 施設・設備 より

体育館

本学には開学以来、専用の体育館はなく、開学当初の体育は高等部や大学の運動場の片隅で・・・その後、1952 年 6 月に短大専用の運動用地（現在は大学 8 号館・9 号館）が提供され、1961 年 4 月には北校舎地階の倉庫を体育室として使用し始めた。1964 年 11 月に青山学院記念館が竣工し、大学と共用での体育館として使用することにより、初めてわが短大にも正規の体育施設でスポーツする機会が到来し、・・・。

1980 年 3 月 10 日、女子短期大学体育館と短大・中等部の数教室の増築が竣工・・・。(p.213)

礼拝堂

本学において、主要なキリスト教活動のひとつである礼拝は、開学当初からしばらくは高等部の PS 講堂で持たれ、その後中等部と共有する青学講堂にて行われてきたが、・・・。

そうしたなか、短大図書館と北校舎の間の敷地に、短大専用の礼拝堂建築の話が持ち上がった。・・・1983 年 5 月 9 日、礼拝堂の献堂式が挙行された。(p.216)

ギャラリー 1983 年の礼拝堂の建設とあわせ、北校舎の廊下と礼拝堂の間の敷地にギャラリーが開設された。

図書館の増築 献堂式 1986 年 9 月 16 日。

短大別館 献堂式 1989 年 3 月 24 日

構内配置図



1950 (昭和25年)



新館 (別館) 1948年竣工 (構内配置図 1950-No.9)



本館 1949年竣工 (構内配置図 1950-No.10)



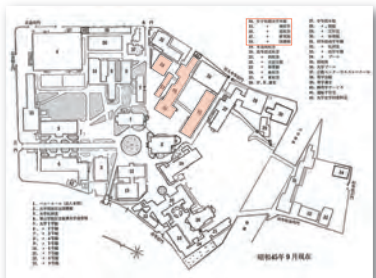
1961 (昭和36) 年頃



学生食堂 (学生ホール) 1960年竣工



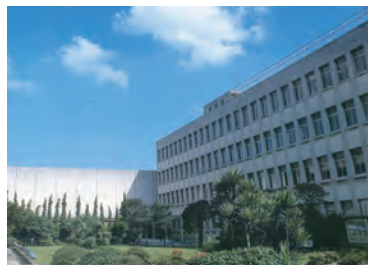
北校舎 1961年竣工



1970 (昭和45) 年



新本館 1966年竣工



南校舎 (右) 1967年竣工



1995 (平成7) 年



教育研究棟 (右) と図書館 (左) 1969年竣工



図書館増築 1986年竣工



短大の礼拝が持たれていた高等部のPS講堂・1951年改修



礼拝堂 1983年竣工



旧木造校舎内部



旧木造校舎 調理研究室



旧木造校舎中庭



学生食堂（学生ホール）内部 1964年頃撮影



青学講堂地下の学生食堂



南校舎（左）と中庭



図書館棟・LL教室



北校舎1階廊下



北校舎・美術室



図書館増築部分内部



南校舎・調理学実習室



南校舎・栄養学実験室



PS講堂での礼拝



青学講堂 1975年頃撮影



礼拝堂にパイオルガン設置 1984年

中軽井沢寮



閉寮後の姿 2014年撮影



閉寮後の姿 2014年撮影



閉寮後の姿 2014年撮影

シオン寮



第一寮 (金王町)



第一寮内部



第二寮内部



シオン寮内部



シオン寮内部



シオン寮庭



注目ポイント

「青山」学院なのに「緑岡」???

「女子短期大学第一回卒業式と一緒に行われました」

旧地名を知ろう

右は、ラファエロ「美しい女庭師（聖母子と幼児聖ヨハネ）」（1507）を掲げた児童教育学科新設時のパンフレット。住所は「東京都渋谷区緑岡 22」と記載されている。1928 年以降、1966 年に「渋谷 4-4-25」に変わるまで用いられた町名で、青山の幼稚園・初等部もかつて「緑岡幼稚園」「緑岡小学校」だった。



ちなみに 1928 年以前は、東京府豊多摩郡渋谷町（1909 年以前は渋谷村）大字青山南町七丁目。田舎のような地名だが、事実、今の渋谷駅のほうへ坂を下るともうあたりは田園地帯。江戸時代は伊予国（愛媛県）西条藩松平家の上屋敷であった。

女子専門学校最後の卒業式

女子専門学校最後の卒業式は 1951（昭和 26）年 3 月に、1948（昭和 23）年 4 月入学の 3 年制の卒業と、1949（昭和 24）年 4 月入学の 2 年制の卒業式として行われた。

昭和 24 年入学者の中には、大学編入者と短大編入者もあり、短大へ編入した者は、昭和 26 年に女子短期大学第一回卒業生（英文科のみ 17 人）として女子専門学校の卒業式と一緒に行われた。

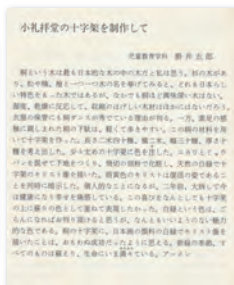


女子専門学校最後の卒業謝恩会 1951 年『青山女学院史』より

「十字架はオリジナル」

「十字架は元・水道管」

短大礼拝堂の十字架



礼拝堂が完成近くなった時、美術室に桐の木十字架が搬入されました。特注です。掛井五郎先生は入念な準備の末、もの凄い勢いでキリスト像を真新しい桐の木に出現させました。

毎週発行されていた「礼拝週報」の [今週のことば]（1983）にその様子が描写されています。

元青山学院講堂の十字架



青山学院講堂に掲げられていた十字架（現在は新しい中等部礼拝堂に）の材料は、江戸時代、多摩川から江戸城まで水を引き入れた玉川上水に使われていた木管。樹齢 300 年の木曾檜という当時でも貴重な材料で、水道管として 300 年も土の中に埋められていながら腐っていないという代物だが、掘り出した地下鉄工事の現場では捨て場に困っていたとのこと。

中部教諭（当時）で彫刻家の小坂圭二先生が縁あってこの材料と出会い、その歴史的な色つやと風格にひかれて譲ってもらい、1973 年に十字架を制作された。

出典：『月刊あおやま』1973 年 12 月号

「みんなの歌集があった」

学生歌集

こんなかわいらしい歌集が新入生に配布されていた時代があります。

初版発行は 1984 年。音楽の高橋好子先生や宗教活動センターが中心になり、讚美歌と学生からのアンケートをもとに選曲して、さまざまな歌を編んでいます。

青山学院のカレッジソングや、短大生の作った歌ものっています。その当時の流行のユーミンやサザンの曲もあります。きっと現在、歌集を新たに編集したら、あいみょんや米津玄師などの曲がのるのでしょうか。



「急速に男子専門部との交流の機運が…」

学友会の復活

1947 年には学生の自主組織である学友会が復活。右は女子専門学校の学友会復活を紹介した青山さゆり会会報『さゆり』掲載写真だが、こんなキャプションが添えられていてほほえましい。



コーラス・演劇など戦後急速に男子専門部との交流の機運が生徒の側からおこったが、教員会も家庭も抵抗があった。右はバレエ部。(女専)

戦争が終わり、男女平等と民主主義の自由な時代が到来した。女専の生徒たちに、のびやかで生き生きとした青春が訪れる。

「ヌードデッサン、消しゴムは食パン」

本格的な教育内容

芸術学科では実技科目「構成I」の導入として、新入生全員でヌードデッサンを行なった。ヌードデッサンはものを見て描くことの基本であり、形の美しさ、人体の構造を知るといった、造形表現の基礎の学びだが、本学のように美術の専門でない大学で行われることは珍しく、本格的な教育内容と言える。

描くには木炭を主に使うが、消しゴムの代わりに食パンの白い部分を使う。バターが使用されている高級なものは画面を汚してしまうのでダメで、一番安いものを使う。

ちなみに耳の部分は使わないので食べる。

